昭和新山学習登山会テキスト 2　　2005,4,23 現在

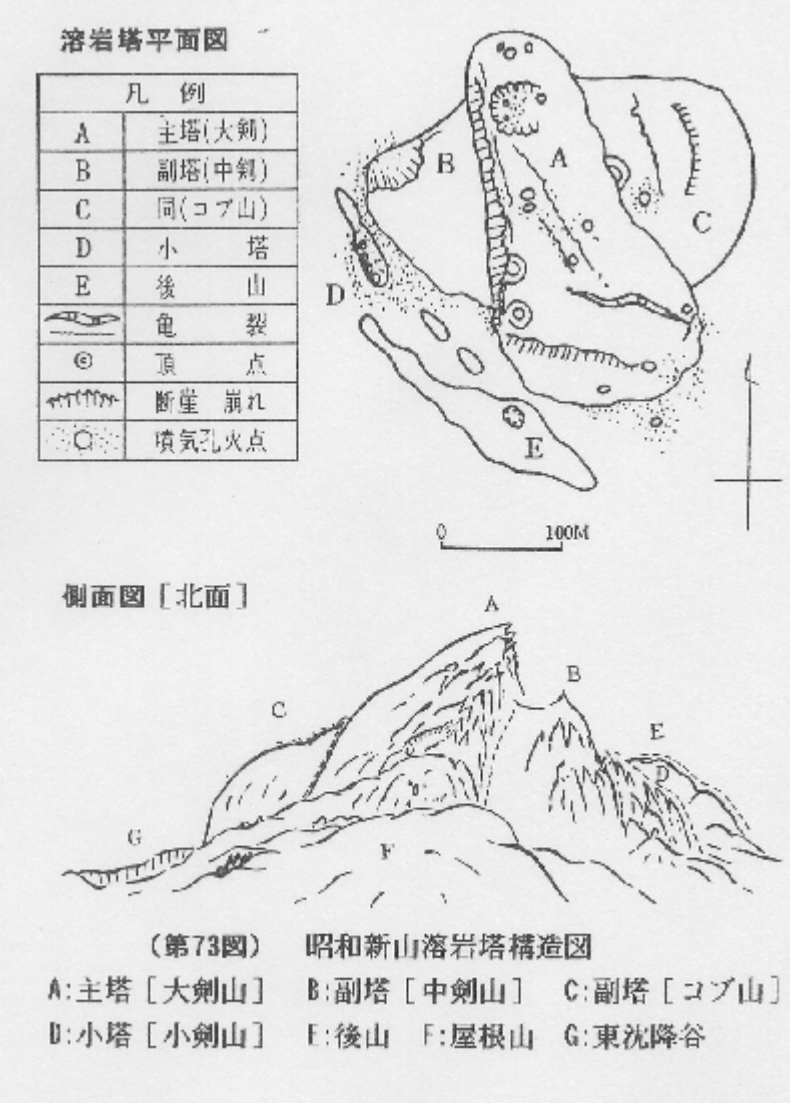
ポイント６　後山（右肩）と後山火口

昭和 20(1945)年 9 月 20 日に昭和新山生成活動が停止後もこの一帯では隆起が 12 月迄続いた。右肩東南斜面に開口しているのが後山火口である。昭和 22(1947)年 5 月 2 日一発のくしゃみ状爆発で開口。昭和新山唯一の残存火口である。

【留意点】

火山噴火毎に住民は、「安全宣言を早く出せ」と騒ぐが、大局的終息についてはコメントも可能であるが、こうした二次的現象も含めると、火山の絶対的な安全を保証する事は至難である。

又、2000 年噴火でも実証されたが、小規模噴火でも斜面に開口した火口の噴火では、噴石が意外に遠距離に至り、後山火口でも現 453 の路面で危険サイズの噴石を三松正夫が確認している。（参照：付図⑤）



（第73図）　昭和新山溶岩塔構造図

A:主塔［大剣山］　B:副塔［中剣山］　C:副塔［コブ山］

D:小塔［小剣山］　E:後山　F:屋根山　G:東沈降谷

ポイント７　柳原層露頭（広葉樹化石）

有珠火山地質図に記載されている古い柳原層を直接見られる唯一の場所である。大地の隆起と熔岩ドームの推上で露出、約 45 度の傾きを持っている。第四紀層の固結度の低い凝灰質砂と火山灰の互層の間に大昔の灌木の葉の化石がある〔有珠山(1973)勝井他〕。

ポイント８　珊瑚岩

昭和新山のドームは、生成過程では４個のグループのドームから形成された。珊瑚岩は第４火口から最後に推上した小塔である。生成直後は掌状に５本の尖塔が伸びていたが損壊、欠損した。珊瑚岩と副塔（中剣山）の間は窪地で、昭和４０年代までは「火の回廊」と呼称された高熱地帯であった。

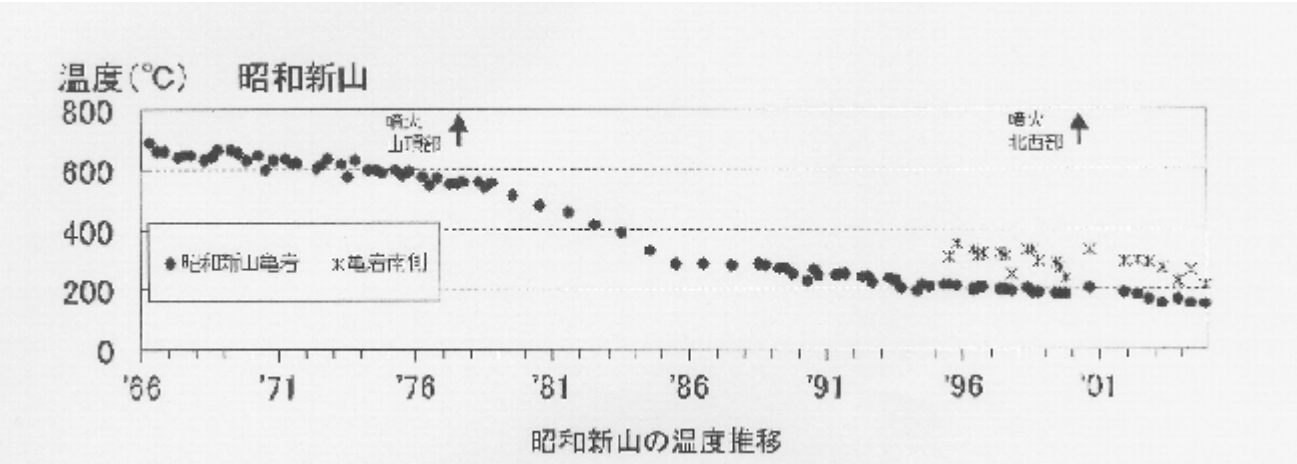
ポイント９　天然煉瓦とデイサイト

昭和新山のドームは赤褐色に彩られてるが、これは熔岩の色でなく、熔岩塔推上の過程で地中の粘土層を焼き、天然煉瓦を形成して固着しているものである。熔岩本体は灰青色で「紫蘇輝石石英安山岩」と呼称され、粘性の極めて高いデイサイト熔岩である。

SiO2 の含有量は 68～70%とされている。かっては推上期に刻まれたスクラッチ（擦状痕）が確認された。

ポイント 10　亀岩

副塔「コブ山」の山頂部にある巨岩で、。生成期より継続されている定点地熱観測ポイントである。昭和 20 年初頭、その白熱光からセ氏 900 度と推定されていた。以降、1977 年有珠噴火迄、順調にほぼ同じ傾向で冷えが進行していたが、1977 年噴火を契機に、温度低下が急激となり、現在又 1977 年以前のペースで冷えている。（参照付表）



昭和新山の温度推移

ポイント 11　山頂　標高の変化と川原石

昭和新山はドーム型火山の代表例と紹介されているが、コブ山から亀岩・山頂に至る箇所では殆ど土壌であり、新熔岩は殆ど見られない。岩塊の多くは斑晶の豊富な、黒っぽい有珠外輪山熔岩であり、山頂部の土壌は洞爺火砕流の堆積火山灰である。

長流川崖に見える洞爺火砕流堆積層と昭和新山左山頂が同色・同質である。又興味を引くのが円礫である。山頂から北東を眺める時、長流川の自然な流れは現在よりも西に寄っている方が自然な流れに思える。おそらく有珠火山形成に伴い次第に東に河川敷きが押しやられ、残されていた河原石が山頂まで運ばれたものである。熔岩ドームのスクラッチと併せ昭和新山が隆起型火山であることを証するものである。

昭和 20(1945)年 9 月 20 日の標高は海抜 407m、翌 21 日の測定では 406.7m。1 日にして 30cm の沈降をしめした。マグマの供給停止を意味するのであろうか。その後順調に標高の低下傾向を示し、昭和 59 年には 402.3cm、平成 13 年度の地形図では 398m に改訂されている。温度低下に伴う収縮現象、隆起体の重量による沈降及び浸食による崩落等の複合的な要素によると思われる。

山頂からは南に駒ヶ岳、その東端に恵山。北東にはオロフレ山・徳瞬別岳・ホロホロ山の連山の彼方に恵庭岳、北には洞爺カルデラと中島ドーム群、その彼方に羊蹄山、その西にニセコ連山と多くの火山が望め、当地がまさしく火山の野外博物館である事を実感出来る。